

〈研究ノート〉

南東地域から見た古典期マヤ文明の崩壊

中 村 誠 一

1 序論

古典期マヤ文明の崩壊とは何か？

16世紀以前の先コロンブス期において、メキシコ南部からホンジュラスとエル・サルバドル西部の地域にかけて盛衰を繰り返した古代マヤ文明（図1）の研究は、世界の古代文明研究の中でも、現在最も注目を集めているものの一つである。中でも紀元9世紀から10世紀にかけて、それまでグアテマラの熱帯雨林低地を中心として繁栄していた古典期（西暦250～900/950年）の都市センターが、次々と没落し放棄されていく現象は「古典期マヤ文明の崩壊」と呼ばれ、その原因は長い間謎とされていた。1970年には、この問題をマヤ地域全域の考古学データをもとに考察・総合するセミナーも開かれ論文集が数年後に出版されたが（Culbert 1973）、それ以来も今日まで、この問題はマヤ文明研究者の間の主要研究テーマの一つであり続けている（Culbert 1977, 1988; Sabloff 1992; Sharer 1982等）。我が国でも、近年環境破壊の観点からこの問題が紹介されている（佐藤1994）。

「古典期マヤ文明の崩壊」とは端的に言えば、

- (1) マヤ古典期を特徴づけてきたマヤ暦を刻んだ記念碑の建立や大規模建造物の建設などが跡絶え、エリート階級の文化が破綻し古典期の（王を含む）エリート階級が存在しなくなったと思われる現象。
- (2) 古典期文明の中心であった都市センターやその周辺部で、見たところ

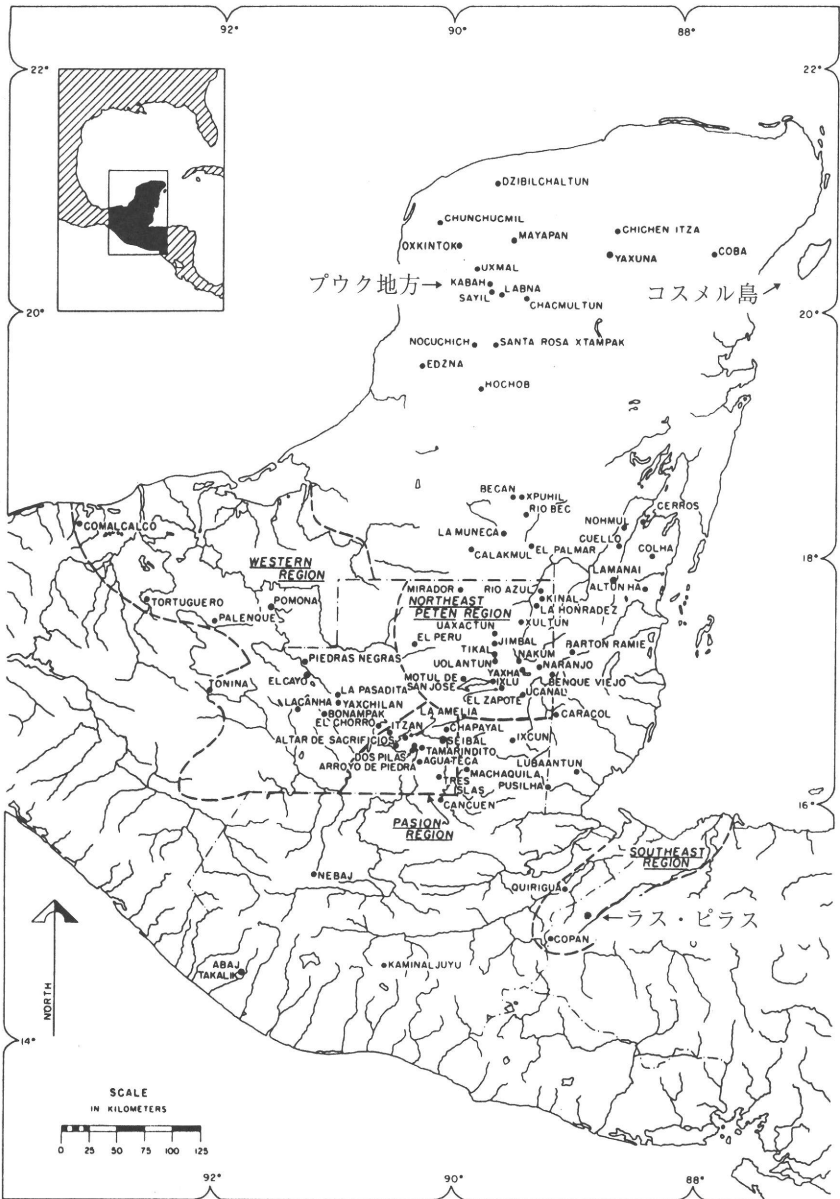


図1 マヤ地域と主要遺跡 (Culbert 1991: Fig. 1. 1 を改変)

急激な人口減少が起こり、やがて放棄に至る現象。

(3) 上述した二つの現象が50～100年という比較的短い期間で起こったと思われること。

の3点を指している (Adams 1973: 22)。

この問題を取り扱った論文の中には、上記(1)と(2)の間の相関関係については特に言及せず、それぞれ独立に考察している論文もあるが、筆者は上記(2)は(1)を原因とする結果であると考えている。すなわち古典期マヤ文明の崩壊とは、まさに古典期マヤ文明を特徴づけてきた王を含むエリート層の政治・経済・社会・文化システム全体の破綻と崩壊がその根底にあり、その結果として都市センターの没落から周辺部を含めた放棄 (人口減少) に至ったと考えられるのである。したがって、これらシステム全体が破綻し崩壊するまでの社会的背景を追及していくことが、同時に古典期マヤ文明の本質を探ることにもつながっていくはずである。

近年、特にユカタン半島北部やベリーセにおいて古典期終末期や後古典期前期に繁栄を迎えたと考えられる遺跡の調査が進むにしたがって、一部のマヤ研究者の中には古典期文明の崩壊を従来ほど強調しなくなってきた傾向が見られる。例えばサブロフは、

- (1) 古典期文明崩壊の開始時期である紀元9世紀の始めには、中・南部低地から北部低地にかけて、芸術、建築、土器面において文化的連続性が確認されている。
- (2) 北部低地のプウク地方諸センター、チチェン・イツァー、コスメル島、南部低地のセイバル等の繁栄が、中・南部低地内の多くのセンターの没落・放棄と同時に始まっている。

という2点に注目し、北部低地の諸センターは古典期の伝統を受け継ぎ、古典期は紀元1,200年頃のチチェン・イツァーの没落まで続いたと主張している (Sabloff 1992: 106)。この見解によれば、古典期マヤ文明の崩壊という現象は、マヤ地域においては先古典期の時代から一つのセンターの発展の陰には他のセンターの没落があり、またそれまでである地域全域を制

圧していたような有力なセンターが没落していく一方で、新たなセンターが勃興してくるといふ相関関係があったと提唱するマーカスの「動態モデル」(Marcus 1993) の一プロセスとして捉えられる。このため彼らは、古典期マヤ文明の崩壊という現象の存在自体にすら疑問を投げかけている (Marcus 1993: 167-168; Sabloff 1992: 105-109)。しかしながら猪俣や佐藤が指摘しているように (Inomata 1995: 22; 佐藤1994: 1), 筆者もまたこの現象を過小評価するのは以下の理由により誤りであると考えている。第一に、9世紀から10世紀にかけて起こった古典期文明の崩壊は、少なくともメキシコのチアパス州からグアテマラのペテン低地を通してホンジュラスの西部にまでおよぶ広い中・南部低地全域を席卷しており、ある意味では連鎖反応的にこの地域のセンターの没落と放棄をもたらしている超地域的現象である。第二に、この広い地域内で古典期終末期に全盛となるセイバルのようなセンターもやがて没落し、後古典期へとその繁栄が継続しない、つまり、この中・南部低地全域には、古典期文明崩壊後の後古典期には、北部低地に匹敵するような有力なセンターは何ら存在していない。この現象は、エル・ミラドルが没落してティカルが繁栄し、ティカルの衰退とともにカラコルが繁栄するといったような先古典期後期から古典期後期にかけての盛衰パターンとは本質的に異なるものであると筆者は考えている。そして第三に、「古典期マヤ文明の崩壊」という現象は、上記定義に見られるように、単に建築や土器の特徴が続いていくといった様相とは別次元の、古代マヤ社会内部の本質的な変化を包含していると考えられるからである。つまり、古典期文明の崩壊を軽視してしまうと、なぜ古典期のマヤ都市センターは、後古典期に南米のアンデス地域や中央メキシコで見られたような「統一的な帝国」へと発展していかなかったのかという古代マヤ政治史における重要問題を見逃してしまう恐れがあるのである。

研究の目的と考察の地域

本稿の目的は、古典期文明崩壊の原因を特定することでも、崩壊のダイナミクスを描くことにあるのではない。むしろ、将来におけるそういった

研究の前段階として、古典期マヤ文明を崩壊に導いた社会的背景を明らかにし、それを通してこの時期に崩壊した文明の本質の一端に迫ることを目的としている。また、本稿において筆者は、この問題をマヤ地域全域の資料を網羅して考察するのではなく、主にこれまでに得られているマヤ地域南東部（東南マヤ地域）の資料を整理・検討することによって行う。筆者が東南マヤ地域を本稿の議論の中心に据えるのは、以下のような理由によるものである。

まず第一に、この地域における古典期マヤ文明の代表的センター・コバンは言うに及ばず、東南メソアメリカ全域におけるここ20年間の考古学を中心とする学際調査の進展には目覚ましいものがある。第二に、このような状況下で、筆者はこの十数年間、東南マヤ地域において長期滞在型のフィールド・ワークを継続しており、この地域で行われた考古学プロジェクトで得られている最新のデータに出版・未出版を問わず精通している。第三に、現在までの調査・研究成果によれば、古典期マヤ文明崩壊の様相は時期的にも地域的にもきわめて多様かつ複雑であったという一般認識がある。したがって、この問題の解明には、地域的なアプローチを用いて地域ごとの様相を解明していくことが必要不可欠である。この視点からは、東南マヤ地域の盛衰プロセスには、この地域が地理的・気候的にも、文化的にも、またおそらく民族的にも、グアテマラのペテン低地のような古典期マヤ文明を代表する地域とは異なった地域であったがための複雑性や特殊性が見られるはずである。しかしながらその一方で、東南マヤ地域がマヤ中・南部低地全域を席卷する古典期文明の崩壊という現象に巻き込まれた事実は、その原因においてこの地域固有の特殊性とともに、明らかに他のマヤ地域と共通する普遍性が存在していたことを示唆している。言うなれば、本稿では古典期マヤ文明崩壊という現象を東南マヤ地域を例にしながらも、中・南部低地全域に共通する普遍性の観点から考察しようとしている。

2 コパン地方国家崩壊の社会的背景

筆者は、遅くとも古典期後期前半（西暦650年頃）までには、東南マヤ地域でコパンを中心とする「地方国家」（Adams 1986: 437; Mathews 1991: 29 参照）が成立したと想定している（Nakamura 1996: 169-181, 207-210）。そして、コパン谷を東南マヤ地域の「中心部」、モタグア谷中流域からキリグアーおよびその隣接部、リオ・アマリージョ谷、パライソ山間谷、ラ・エントラダ地域の大部分を経てククヤグア・センセンティ地域等を「周縁部」、モタグア谷下流域、ラ・エントラダ地域の一部やキミスタン、ナコ、サンタ・バルバラといった地域を「外縁部」と位置付けている。筆者の「コパン地方国家モデル」においては、この地方国家を形成しているのは上述した「中心部」と「周縁部」であり、「外縁部」はコパンを中心とする地方国家には直接属さない地域である¹⁾。

738年事件

ヤシュ・クック・モオによって紀元5世紀の初め（西暦426年）に興された王朝を中心とするコパン政体が、その後どのように発展していったのか、また周辺地域をどのようなプロセスの中で自政体に取り込んでいったのか、という問題に関してはいろいろな仮説が提出されていると同時にその併合時期に関しても検討が行われている（中村 1996）。しかしながら、コパンは紀元7世紀のなかばから8世紀の初めにかけて、すなわち王朝第12代目の「煙イミッシュュK神（煙ジャガー）」王の治世から第13代目の「18ウサギ」王の治世に全盛期を迎えていたことはまず間違いないと考えられる（Fash²⁾ 1991: 112-114; Schele and Freidel 1990: 315）。この全盛期にあったコパン政体に襲いかかった災難が738年事件である。

「738年事件」と筆者が特別な名称で呼ぶのは、碑文解読学の成果により西暦738年5月3日に起こったとされるキリグアーの「カウアク空」王によるコパンの「18ウサギ」王の捕獲・斬首事件のことである。この事件に関しては、別稿で詳細に検討されている（中村1996(3): 44-47; (4): 23-24）のでここでは繰り返さないが、本稿の論旨で重要な点は、碑文学

的証拠（キリグアー石碑 E 西側碑文）、図像学的証拠（キリグアー祭壇 L）、また考古学的証拠（遺跡規模）から、それまでコパンの属国であったと思われる 2 次センター・キリグアーが 1 次センター・コパンに刃向かい、その支配者を捕獲・斬首した事件であったという点である。筆者は、738 年事件はコパンとキリグアーだけではなく、東南マヤ全域に大きな影響を及ぼした歴史的な事件であり、この地域における古典期文明崩壊のプロローグであると位置付けている（中村 1995: 12-14 等）。この筆者の見解は、主に周縁部や外縁部のデータを考慮した中心部の外からの視点に基づくものである。

地方国家中心部における求心力の低下

738 年事件によってコパン王の威信が失墜し、地方国家の中心部で王の求心力が失われていくプロセスとそれに対する王の反応に関しては、ファーシュらが再構成している（Fash 1991: 129-177）。この点に関しても、別稿ですでに述べられている（中村 1996(4): 24-26）のでここでは繰り返さない。コパン谷内における一連の調査結果で本稿の主題と関連した重要な点は、738 年事件後のコパン政体の危機的状況とそれを乗り切り求心力を回復しようとする王家の方策が、王に権力が集中した伝統的な政治体制から、9 つの有力家系による公的権力共有制への転換という王の側からと、自分たちの家系に関して公的な碑文を記念碑として残したり居住区を石造彫刻で飾る特権的行為を許され、王からかつてない公的権力・権限を与えられたエリート層の側の両方から示唆されている、という点である。つまり、それまで従属関係にあった 2 次センター・キリグアーの支配者が、1 次センター・コパンの王を捕獲し斬首するという個別的な事件が、地方国家中心部において王の威信を失墜させた。そして、それに対して求心力を回復しようとする王側の戦略が、それまで王に従属していたエリート層の権力・権限を著しく高める結果に発展していったと思われるのである。こういったプロセスにより、社会階層上部における緊張関係が次第に高まって行ったのは想像に難くない。

周縁部における求心力の低下

古典期文明崩壊前夜のコパン地方国家「中心部」で観察される上述したような社会的背景は、コパン谷の外の「周縁部」でも観察されるのであろうか？ この点を解明するためには、周縁部2次センターの調査が鍵を握ることになる。周縁の2次センターは、それぞれ独自の支配域と農民を抱えており、どの1次センターと主従関係を結ぶか、自治を犠牲にしても地方国家の中心である1次センターと主従関係を維持していくのか、あるいは戦争が増加したとしても1次センターから独立を図りより大きな自治を享受するのか、これらの決定は2次センターを統治する支配者の独自の意思決定に委ねられていたと考えられる。この意味において、中心から離れた周縁の2次センターは、統合された一つの地方国家の位階制全体の弱点であり、その政治組織の中で一番ダイナミックで枢要な位置を占めていたといえる (Marcus 1993: 164-166)。

ここ数十年間における筆者らの調査により、考古学的観点から周縁部2次センターであると思われる遺跡は、キリグアーを除きこれまでに9つ確認されている³⁾。そのうちの2つの2次センター (エル・プエンテ, ラス・ピラス) において、筆者の指揮のもと大規模な発掘調査が (Nakamura 1994: 65-68, 75; 1996: 82-83, 114-118 等), また4つの2次センター (ロス・イゴス, エル・アブラ, ラス・タピアス, サンティアゴ・デ・ポスタ) においては試掘調査が行われている (Nakamura et al. eds. 1991)。さらにその他, リオ・アマリージョにおいては、70年代なかばにUCLAにより試掘調査が行われた後 (Pahl 1987), 95年からはハーバード大学により試掘を含む予備調査が行われている。そしてこのうちの一つであるラス・ピラス遺跡 (図2) においては、現在調査継続中ではあるが、本稿の主題に関する大きな洞察が得られている。

ラス・ピラス遺跡はフロリダ谷の南西平野部、海拔約460メートルの地点に位置し、ラ・エントラダ地域内では一番コパンに近い2次センターである。遺跡全体はこの地域の主要河川・チャメレコン川の支流であるオ

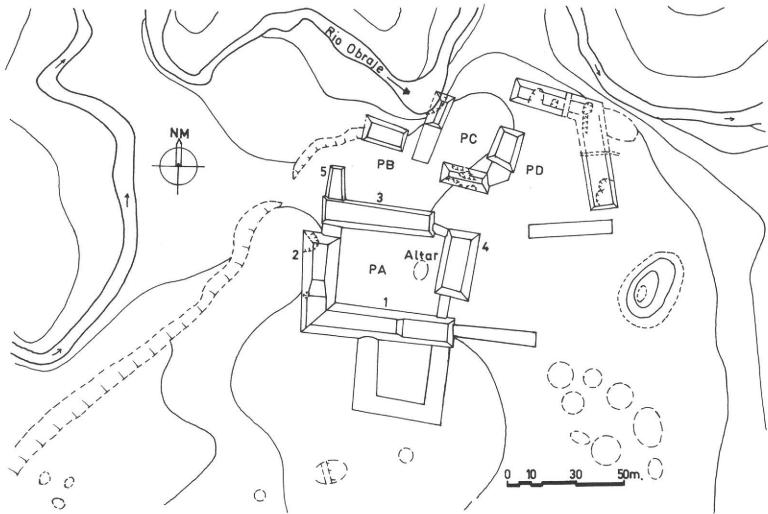


図2 ラス・ピラス遺跡中心部

ブラヘ川に沿って1キロ以上にわたって200基ほどのマウンドが存在している。遺跡は1984年にラ・エントラーダ考古学プロジェクトによって発見され、1987年から89年にかけて、1平方キロ近くをカバーする遺跡全体の平面図作製や試掘調査が行われた。その結果、コパン周縁部の2次センターとしてはロス・イゴス（ラ・ベント谷）、リオ・アマリージョ（リオ・アマリージョ谷）とともに石に刻まれた碑文断片が確認された。それには、シーリヤスチュアートによりラス・ピラスの紋章文字である可能性が指摘されている文字や「ボロン・バキ（9つの骨、9人の捕虜の意味）」と読まれるマヤ碑文において、戦争の主題表現に重要な文字が含まれていた（Nakamura 1996: 80-84, 209; Schele 1989: 211; Stuart 1985: 97-98; スチュアートからの私信, 1991, 1995）。

1995年以降行われている調査には、遺跡の中心グループ内で最大の建造物2番における平面発掘調査や同建造物の縦断トレンチ調査等が含まれるが、これまでの調査によって、ラス・ピラスにおける居住の起源は先古典



写真 1

期中期（紀元前900年～紀元前300年頃）まで遡り、少なくとも1回の衰退・放棄の時期を経て、断続的に古典期終末期（紀元850年～950年頃）まで居住が存続したことが明らかになっている。さらに、この遺跡が地方センターとして確立・発展した古典期後期には、碑文だけでなくミニ・コパンといえるほどの石造彫刻によって飾られていたことが明らかになっている。現在まで、建造物2番における平面発掘調査により確認・回収されているモザイク状石造彫刻の中で、最終居住段階に対応するものは717点に及んでいる（第一フェーズでこの建造物から回収されていたものやコパンの倉庫でラス・ピラス出土のものと確認されたものを含めると724点ほどになる）。

建造物2番の最終居住段階の上部構造は、それぞれベンチを伴う3つの部屋を有していたが、南の部屋の背後では、建物のフリーズを装飾していた石造彫刻群が崩壊した状態のまま発掘された（写真1）。こういった状態での出土例はコパンでもこれまで10例に満たない貴重なもので、組み合

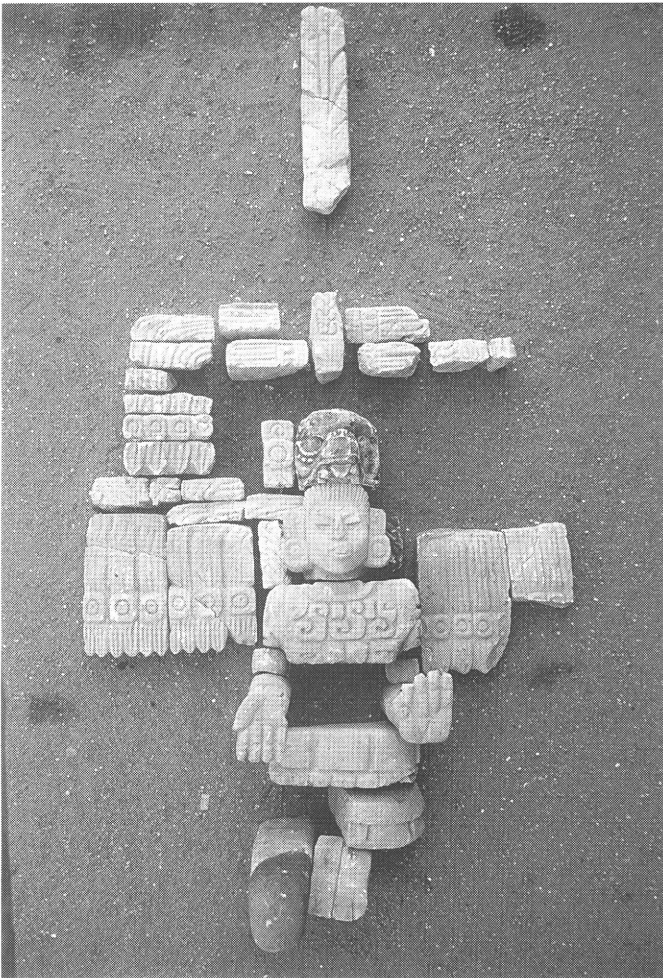


写真 2 (暫定的組み立て例)

わせ後、ほぼ完全な人物像を形成した(写真2)。これほど集中してはいないが、同じモチーフを有する石造彫刻群は同建造物周辺全体に数多く確認されており、それぞれの部屋上部のフリーズにも前後各1体ずつ人物像が飾られていたと思われる。これらの石造彫刻群は、様式的にはコバンのセプルトゥーラ区でファーシュらが発掘した建造物 9 N-82や、中心グ

ループ南側のセメンテリオ区でアンドリュースらが発掘した建造物 10L-32等の人物像に酷似しており (Andrews V and B. Fash 1992; B. Fash 1992; Fash 1986), 装飾していた建物が最終居住段階の建物であったことも考慮すると, ヤシュ・パサフの治世にあたる時代のもの (8世紀後半) であることはほぼ疑いがない。上述した南の部屋背後上部のフリーズにはめ込まれていた人物 (写真2) の胸飾りは「煙」を具象化し, その手の形や人物像を構成する石彫群とジャガー石彫との出土上の共伴関係 (写真1参照) から, この人物にはジャガーの要素が意識的に組み込まれていると推定される (カール・タウベからの私信, 1995)。また, ラス・ピラス遺跡出土の石彫の組み立てと復元を指揮するバーバラ・ファーシュが, 人物像上部の装飾の一部と同定した石彫の中には, 「装飾されたアハウ」と呼ばれる文字⁴⁾を持つものがあり, 「血縁, 親族」を意味すると考えられている (ファーシュからの私信, 1996)。以上のことから, 筆者はこの人物はこの建物に住んでいたラス・ピラスの支配者か, その息子を表わしているかと想定している。

この発見で本稿の主題と関連した重要な点は, ヤシュ・パサフの時代, すなわちコパン王朝の崩壊前夜には, コパン谷内の有力家系がモザイク状石造彫刻類によって自分たちの家を王の居住区のように飾っていたのと同じ現象が, 周縁部の2次センターにおいても観察されるという点である。これに加えて, ラス・ピラスやロス・イゴスといった周縁部の2次センターにおいては, 紋章文字を所有し刻むようになった可能性があること, ロス・イゴスの石碑の図像に見られるように, 周縁部2次センターの支配者が, コパン王家の者にしかその使用が許されていなかった装束を身に付けるようになったこと, エル・アブラ出土といわれるアラバスター製の容器に彫られた碑文に示唆されているように, ヤシュ・パサフが周縁部2次センターの支配者との繋がりを強化しようとしたことも推測されている (Schele 1989: 211-212)。この時期, 周縁部全域にわたり大量に出土するコパドール多彩色土器の流通も, コパン王家により政治的に統制され, 意

図的に2次センターへ分配されていたと筆者は考えている (Nakamura 1994: 78-79)。こういった現象は、単に周縁部の2次センターの支配者がコパン王家の模倣をして、自分たちの権威づけに利用したというばかりではなく、コパン王家の側から従来は王家にしか許されていなかった公的な権力・権限を周縁地域の支配豪族たちに与えることによって、彼等がキリグアー政体へなびくのを引き留め、王家の求心力を保とうとしたコパン王の戦略であるとも解釈されるのである。

一方、筆者はラス・ピラスの建造物2番が、いくつかの点においてこのセンターの支配者独自の意思決定により設計され、建設されたと考えている。まず第一に、この建造物出土のマヤ文字石彫ブロックは、建物のフリーズを囲む下部コーニス (モールディング装飾部) を構成していた碑文の一部であったと考えられる⁵⁾。コーニスに碑文が刻まれていたことが確認されている建造物は、コパンではほとんど存在しない。第二に、ラス・ピラスの建造物2番は、上部構造として正面に入口を持ったほぼ同じ大きさの平行に並んだ部屋3つを有している。こういった設計の建造物は、コパンの例においては、通常真ん中の部屋が側面に位置する2つの部屋よりも大きくなるのが普通である (たとえば、セプルトゥーラ区の9N-83)。上述したような2点は、むしろ正面階段の両脇にある斜面状装飾帯とともに、後に建てられたキリグアーの建造物1B-1に似た要素である (Morley 1935: 123-134)。ラス・ピラス中心部のサイト・プランは「クアドラングル」⁶⁾というモタグア谷下流域固有のものである点も考慮すると (Nakamura 1996: 81)、地理的にはコパンよりもキリグアーを含むモタグア谷下流域に近いこの2次センターの、移り気な独自の意思決定を示唆しているのかもしれない。

このようにラス・ピラスの調査結果は、コパン王朝の崩壊前夜において、それまで従属関係にあったと想定される2次センター支配者たちの権力・権限が著しく高まると同時に、独自性をも主張し始める結果に発展していったことを、初めてコパン谷外の周縁部の考古学資料から示唆している。

周縁部でもまた、社会階層の上部において、王と地方豪族間の緊張関係が次第に高まって行ったのである。

3 コパン地方国家と古典期マヤ文明の終焉

コパン中心部で王朝が崩壊した正確な年代の同定は未だなされていないが、この問題と関連して、以下の記念碑が注目されている。

(1) 石碑11。この碑文には、王朝創始者のヤシュ・クック・モオと16代目の王であるヤシュ・パサフの名前が見られるが、スチュアートは碑文の最初に現われる「8アハウ」の日付が「期間の終り」を記していると仮定して、長期暦では9.19.10.0.0 8アハウ 8シュル（西暦820年5月6日）の日付を有するコパンにおける最後の石碑であると考えている。スチュアートはそこにはヤシュ・パサフの死と王朝の崩壊を示唆するような記述が読み取れると解釈している（Stuart 1993: 344-345）。

(2) 3チクチャン、3ウォのカレンダー・ラウンドの日付を有している祭壇L。この祭壇は、80年代後半にシーリらによって、「ウ・キット・トック」と呼ばれる人物が、16代目の王ヤシュ・パサフの死後王位に就くことを狙い祭壇Qをまねて彫らせようとしたが、予期せざる政治変動のため製作途中で放棄されたものと解釈され注目された（Grube and Schele 1987）。しかしながら近年スチュアートはこの解釈を疑問視している（Stuart 1992: 180）。確かに、3チクチャン、3ウォの長期暦9.19.11.14.5（西暦822年2月10日）への換算は一つの選択肢にすぎないが、ファーシュを始めとする大多数のコパン研究者は祭壇の彫刻様式も考慮に入れた上でシーリの解釈を支持している（ファーシュからの私信、1996）。

上述したように石碑11が死後のヤシュ・パサフを表わしているとする、ヤシュ・パサフの死去以後、ウ・キット・トックが王位をねらって祭壇Lを彫らせるまでに、約2年という王不在の期間が経過していることが注目される。ファーシュも指摘しているように、これはヤシュ・クック・モオ

王朝崩壊後のコパン谷内の混乱と有力家系間の政権抗争を暗示していると思われる (Fash 1991: 178)。一方「周縁部」や「外縁部」においても、古典期後期の後半には、ほぼ同規模の2次センターが等間隔に分布するという空間配置に、貢納や黒曜石等の重要資源を巡って、センター間の競合・戦争が起こっていたことが示唆されていると筆者は考えている (Flannery 1976: 170; Nakamura 1996: 208-209)。ヤシュ・パサフの死とともにコパン王朝が瓦解しセンターがセンターとして機能しなくなると、大多数の農民たちはその土地を捨ててコパン谷の外へ移住して行ったと思われる。すなわち、生活に必要な不可欠な財や物資の入手が不可能となり、宗教的拠り所がなくなり、戦争や社会不安が増大して社会的な秩序が保たれなくなり、自分たちの日々の生活が保証されなくなったとき、人口ピラミッドの大部分を占めていた農民たちも土地を捨てて、他の地域(コパン地方国家の周縁部からさらに外縁部)へ移住して行ったのではなかろうか(中村 1995: 13 参照)。

近年、「特定の都市における王朝崩壊とセンターとしての機能停止後、今まで考えられていたような急激な人口減少は起こらず、周辺部ではそれから数百年間、人口が暫減しつつも居住が継続していた」と主張され、本稿の始めに述べた「古典期マヤ文明崩壊」の3番目の定義が疑問視されることが多い (e.g. Freter 1994)。この主張は、王朝崩壊後のコパン谷にいつ頃までどの程度の人口が住んでいたのか、という問題点に関して、ペンシルバニア州立大学チームがセトルメント調査を通して、「かなりゆっくりとした人口減少パターン」を提唱していることがその拠り所となっている。しかしながら、コパン谷におけるこのような人口動態復元の年代的な拠り所である黒曜石水和層の測定年代に関しては、その有効性を巡って議論が続けられているだけではなく、周縁部では土器の型式学的年代と符合しない点が存在するなど注意が必要であると筆者は考えている (Braswell 1992; Webster et al. 1993; Nakamura 1996: 67)。また、フレーター自身が行った周縁部ラ・エントラダ地域の資料の黒曜石水和層年代測定におい

ては、何ら遅い年代が得られなかったことにも注目する必要がある (Aoyama and Freter 1991: 140-141)。さらに彼等の人口動態復元が正しいとすれば、コパン谷の農民ら一般居住民たちは、王家とエリート層崩壊後、数百年間も谷間に住み続けたことになり、王やエリート層がいなくても彼等の日常生活には、政治的、経済的、宗教的に何ら支障はなかったということになってしまう (Tourtellot 1993: 227)。このため、従来考えられていたほど急激な人口減少と放棄ではないにせよ、コパン谷においても紀元1,000年頃にはほとんど居住はなかったのではないかと考える研究者は依然多い。つまりこの見解によれば、王朝崩壊とセンターとしての機能停止後、100年から150年位ではほぼ完全に放棄されていることになる。この問題を解決するためには、黒曜石水和層の測定による絶対年代ではなく、土器の型式学的分析に基づいた相対編年が基本とならねばならないというのが筆者の立場である。

4 古典期後期後半の中・南部マヤ低地

以上概観してきたような南東部における崩壊のプロセスと社会的背景は、他のマヤ地域にもあてはまるのであろうか？ 紀元600年ころから始まる古典期後期には、コパン、パレンケ、ティカル、カラクムル、カラコルといった地方国家が存在する一方で、各地に新たな新興国家が勃興し小政体が乱立する群雄割拠的な様相を呈していたと思われる。しかしながら、紀元8世紀以降の古典期後期後半には、古典期文明崩壊の前夜として各地で興味深い事象が報告されている。

上述した東南マヤ地域とは、中・南部低地をはさんで対角線上に位置する北西地域のパレンケでは、王たちが残した碑文の上にこの時期の政治的な様相が示唆されている。パレンケで碑文の記録に考古学的な資料が伴うようになるのは、紀元7世紀のパカル大王と、息子のカン・バラム (チャン・バルーム) 2世の統治からである。そのあとを継いで西暦702年に即位したカン・シュル2世は、711年にトニナーの支配者「3」に捕獲され

斬首されてしまったことがトニナーの碑文や図像に残されている (Sharer 1994: 293-295)。王国の全盛期に、近隣の小政体に王が捕獲され斬首されてしまった点、その後も王都内で建造活動が継続する点、この事件によって王国が直ちに瓦解はしないものの、これを契機として衰退への道をたどっていく点は、先述した南東地域のコパンの事例とよく類似している。

パレンケでは、西暦722年にチャアカル3世が王位を継ぎ、いくつかの建造活動を行っているが、碑文の記録にはチャック・スツツというパレンケの王の従属支配者が再三登場するようになる。見たところこの人物は、「サハル」(Stuart 1993: 329) と呼ばれる地位にいた戦争のチーフで、王がこの人物の戦争での功績を碑文に言及しなければならないほど (あるいは、碑文での言及が許されるほど)、権力を有していたと推定できる。つまり、北西地域のパレンケにおいても、地方国家内における王の臣下たちの政治的な地位と権力が、トニナーによるパレンケ王の捕獲と斬首という事件以後、著しく増強したと推定されるのである。さらに、碑文の記録によれば、チャアカル3世に続くクック王が764年に即位しているが、771年にはそれまでパレンケ地方国家を構成していたと推定されるポモナが紋章文字をもち、パレンケからの独立を達成 (あるいは宣言) したと思われる (Sharer 1994: 296)。

このパレンケの事例は、コパンの事例とは異なり、その大部分が碑文の解読によって明らかとなっているもので、いまだ考古学的な資料によって裏うちされたものではないという点は注意しなければならない。しかし、北西地域の碑文で示唆されている古典期後期後半のパレンケ地方国家内における、王の臣下たちの権力の増強と周縁の2次センターの政治的 (そしておそらく経済的) 独立指向は、南東地域の詳細な資料に示されている地方国家内の社会的緊張が、中・南部低地における全体的な現象であったかもしれないことを示唆している。

もう一つの事例を見てみよう。それは、パシオン川南部のペテシュバトゥン地域である。バンダービルト大学調査団によって、主に碑文解読の

結果明らかにされているこの地域の政治史によれば (Houston 1993: 95-126; Inomata 1995: 820-828; Sharer 1994: 225-232), ティカルと同じ紋章文字を持ち、ティカル王家の一派であると思われる支配者「1」が、紀元7世紀の前半ドス・ピラスで即位する。この王は、イツァン、エル・チョロといった近隣の小政体と婚姻関係を結んで同盟すると同時に、ナランホとも婚姻関係を通じて同盟したことが碑文の記録により示唆されている。さらに、西暦679年には、ティカルの26代目の王である「楯頭蓋骨」王を捕獲し生贄にしたこと、カラクムルやエル・ペルーとも同盟しティカルに対抗したことが記録されている。この時期においては、ペテシュバトウン地域の主要政体は分節の様相を呈し、それぞれ独立的地位を保っていたと思われる。支配者「1」を継いだ支配者「2」や支配者「3」は、支配者「1」と同様、戦争による征服と婚姻による同盟を通じて、政体の支配域を拡大していったようである。その中には、西暦735年にドス・ピラスの支配者「3」がセイバルの支配者を捕獲し生贄にしたこと、カンクエンと婚姻を通じて同盟したことも記されていた。この時期、ドス・ピラスとアグアテカは「双子王都(Twin Capital)」になったようである。

西暦741年に即位した支配者「4」の治世下で、ドス・ピラス／アグアテカ政体はパシオン、チシヨイ両川流域の約4,000平方キロの地域を支配下に置く地方国家へと最大限の発展を遂げた模様であるが、761年に従属していたタマリンディートの支配者に支配者「4」が捕獲され生贄にされると、それまでドス・ピラス／アグアテカに従属していた2次センターの謀反や反乱を招いたようである。求心力が失われたドス・ピラス／アグアテカ地方国家は、互いに覇権を争って競合するいくつかの政体に分裂したことが想定されている。王家は、他の政体との戦争において防御面で優れているアグアテカへ移り、それから少なくとも40年ほどは存続した模様である。しかしながら、結局アグアテカも9世紀にはいると、最後には他の政体の攻撃を受けてセンターは焼かれ、突如放棄されてしまったと考えられている (猪俣1997)。

このように、古典期後期後半のペテシュバトゥン地域では、それまである政体に従属していた別の政体の支配者、別の言い方をすれば1次センターに従属していた2次センターの支配者が、1次センターの王を捕獲するという謀反・反乱や、そうして分裂した小政体間の競合や戦争が、著しい社会不安や混乱を引き起こしていたという古典期文明崩壊前夜の様相が明らかにされている。また同じ脈絡において、スチュアートは、8世紀後半以降残された碑文には戦争の記述が多くなっていることを指摘している。ボナムバックの壁画は言うに及ばず、パレンケ、ヤシュチラン、ピエドラス・ネグラスといったセンターで知られている最後の碑文はすべて軍事的な主題を取り扱っているのである (Stuart 1993: 333)。確かに、ペテシュバトゥン地域の考古学的・碑文学的な資料が示している戦争の規模や集約性は東南マヤ地域の事例とは異なるにしても、先述した東南マヤ地域における古典期文明崩壊前夜の様相は、その他の中・南部低地全域と本質的に共通する普遍性を有していたと筆者は考えている。

5 結論にかえて——古典期マヤ文明崩壊と古典期文明の特質——

本稿での検討から、古典期マヤ文明はその絶頂期である古典期後期のすぐあとに突如として崩壊したという見解が誤りであるのは明らかである。実は、古典期マヤ文明の崩壊に至る前には長い社会的緊張の時期があったのである。南東地域においても崩壊への契機となった738年事件から、実際にコパン王朝が崩壊するまで90年近い時間が経過している。同様な見解は、近年碑文の研究成果からも示唆されている (Stuart 1993: 336, 344)。

本稿で検討したように、古典期マヤ文明崩壊の背景には、まず古典期マヤ社会内部の問題があったようである。中でも南東部の資料からは、738年事件により失墜した威信回復のため採られた王家の政策により、コパン地方国家の中心部において、従来王の臣下であった有力家系がそれまでに無い権力を握るようになってきた点、それまで地方国家の中心部である1次センターを支えていた周縁部の2次センターの支配者が、王家への謀

反・反乱を含む独自の意思決定を行い、政治的（そしておそらく経済的）独立への動きを始めるようになった点が示唆されている。その結果、地方国家が分裂して生じた小政体間の競合・戦争が激しくなり、東南マヤ全域にわたり大きな社会的混乱があったと思われる。こういった社会階層上部の緊張が増していくプロセスは、パレンケやペテシュバトゥン地域の事例からも、中・南部低地全体における古典期文明崩壊前夜の普遍的な様相であったことが示唆されている。

しかしながら、東南マヤ地域の事例に見られるように、なぜ絶頂期にある1次センターの王が、従属していた2次センターの支配者に捕獲・斬首されるというような、領土の征服や大規模破壊をともしなわれない戦争によっても政体は衰退し、古典期文明が崩壊へと向かったのであろうか？ この点に関しては、デマレストが提唱している「銀河系的政体モデル」（Demarest 1992 他）の中に、考えられうる解答の一つを見い出せるかもしれない。この仮説は、タイ・東南アジアの仏教的王権の歴史的・構造的な研究から生まれたタンバイアの「銀河系的政体論」（Tambiah 1976; 関本 1987）や19世紀バリの王権に関する研究から提出されたギアーツの「劇場国家論」（ギアーツ1990）をマヤ文明研究へ援用したものである。

デマレストは、古典期マヤ政体は王の有している権力・権限が、土地の所有や大規模な集約農耕システムの管理、そこからの生産物に対する統制といった経済的な基盤に基づいていたのではなく、むしろ王個人のカリスマ的指導力や宗教、民衆への気づかひを頻繁かつ効果的に誇示して見せる儀礼といった観念的な側面に基づいていたと考えている。つまり、古典期マヤ社会は現実の制度化された権力よりも、王の政治的・観念的威信によって成り立っていた社会で、王の経済的基盤はそれほど強くなかったと考えるのである。このような社会では、世界軸の化身であり、世俗的な世界と神聖な世界との交信を司る王のカリスマ性や政治的威信こそが重要である。したがって、政体間の抗争に伴う王個人の捕獲・斬首といったような特定の事件により、王個人を捕獲・斬首した政体側は政治的威信を高

め急激に発展する一方で、捕獲・斬首された王はそのカリスマ性を失い、その政体は急速に衰退するといった脈動パターンを引き起こすことになるというのである。このモデルによれば、古典期マヤ社会の政治状況は、競合している小政体同士が、個々の支配者の政治運や威信にしたがって絶えず盛衰している、たいへん不安定で変わりやすいものであった。そしてこのような、経済的な基盤が弱く、著しく観念的な側面に依存していた古典期マヤ文明の特質自体が、また同時にその文明の崩壊を促したと考えられるのである。

このデマレストのモデルは、80年代前半まで全盛であった「生態学的モデル」の対極に位置しているといえる。このモデルのように、文明の経済的基盤を軽視した考えには当然異論もあるし (e.g. Carneiro 1992; Chase and Chase 1996: 808), 筆者も全面的に賛成することはできない。しかしそれでもなお、筆者は、このモデルは古典期マヤ文明の本質の一端を見事に描写していると考えている。しかしながら問題は、各地方国家やそれが分裂してできた小政体では、それぞれ固有の問題点と社会的状況を抱えていながら、どうして中・南部低地全体として連鎖反動的にセンターの没落と放棄という現象を引き起こして行ったのかという点である。デマレストの「銀河系の政体モデル」だけではこの疑問点は説明できない。なぜならば、あくまでも脈動パターンにより、一政体の崩壊とともに地域内の別の政体が勃興し発展して来てもいいはずだからである。

この点で筆者が注目しているのは、やはりデマレストが、先古典期中期のメソアメリカにおけるチーフダム間の相互関係や先古典期後期のグアテマラ高地における諸センターの発展をモデル化した「格子状相互作用モデル」(Demarest 1986: 180-186; 1989: 331-344) である。しっかりした経済基盤を持たない不完全な初期国家においては、社会の支配者である王は、自分たちの国際的な権威や超自然的なカリスマ性を国内的に誇示して、常に自分たちの政治権力を補強していく必要性があったはずである。このため、「同列政体(Peer Polity)」(Renfrew 1986) の支配者の間に「格子状

ネットワーク」が形成され、支配者はそのネットワークを通して宗教的・観念的情報交換を行うとともに、自分たちの政治的権威の象徴となる威信財の交易を行っていた。王家の間の婚姻や相互訪問による同盟関係の締結・強化もこのネットワークを通して行なわれていたはずである。しかしながら、同時に、この格子状ネットワークに参加することによって各政体が次第に相互依存関係に陥っていったことが、やがて中・南部低地全体として連鎖反応的にセンターの没落と放棄という現象を引き起こして行った背景にあると考えられるのではなかろうか (c.f. Sharer 1994: 341-342, 347)。このような考え方を基礎にすれば、格子状ネットワークを崩す内部要因として、先に見たように社会階層上部における王家と従属エリート層の間の緊張関係の高まり、有力な家系同士の競合、2次センターの支配者の反乱、ペテシュバトゥン地域の例で見たような政体間の戦争といった要因が古典期文明の崩壊に重要な役割を果たしたと考えられるのである。

しかしながら、古典期マヤ文明の崩壊によりマヤ文明が終結したのではなく、その後ユカタン半島北部を中心として「後古典期マヤ文明」が繁栄していった。どうして、チチェン・イツァーやマヤパンに匹敵するような大センターが後古典期中・南部低地では存在しなかったのであろうか？ 別の言い方をすれば、どうして、中・南部低地内で新たなセンターが勃興して後古典期に繁栄しなかったのであろうか？ この疑問点に関しては、古典期の終末におけるマヤ中・南部低地の環境破壊を含む生態的劣悪化が、古典期諸センターの没落後の復興を妨げたという仮説があるが、ペテシュバトゥンなどそのような環境破壊を示唆する証拠のない地域も多く、十分な説明ではない。後古典期のマヤ社会は、明らかに中央メキシコの影響を受けたと思われる古典期のそれとは異なった政治・経済体系をもっていたことが指摘されており (Sharer 1994: 385, 403-405)、マヤ地域全体を眺めた場合、中・南部低地の古典期センターの復興を必要としない大きな変動があったものと思われる。筆者は、プトゥン・マヤ族によって、古典期のような政治的・観念的な側面ではなく、より経済的・物質的な側

面を重視した新しい長距離交易ネットワークが、中・南部低地を巻き込まない形で再編成されたことが、その原因の一つではなかったかと推測している。つまり、これまでいわれていることであるが (e.g. Sabloff 1992: 107-108), プトゥン・マヤ族による沿岸航海術の発達により交易物資の大量輸送が可能となり、古典期からすでに存続していたが副次的なルートであった、タバスコ州からユカタン半島北部を經由してベリーゼやホンジュラス北部に至る「環ユカタン半島」ルートが発達し、主要ネットワークとなったのではなかろうか。こういう状況下においては、熱帯雨林に覆われた危険の多い中・南部低地は孤立せざるをえなくなり、大センターは発展しえなかったであろう。

また、筆者は、古典期中・南部低地のセンターの没落と放棄後、古典期終末期に発展する東南マヤ地域「外縁部」やユカタン半島北西部のプウク地方の諸センターも、100～150年間という短い期間の後やがて衰退・放棄に至る現象にも注目している。南東部を例にとれば、「外縁部」の社会もコパン地方国家崩壊後は長く繁栄することができなかったのである。つまり、古典期マヤ文明の崩壊という現象は、その規模や席卷した地域ばかりではなく、その影響度からいっても、それまでの脈動的な「銀河系的政体」の盛衰とは異なる現象であったのと同時に、古典期から後古典期へと続くマヤ地域全域やその周辺地域の政治的・社会的に大きな変質への一プロセス (Sharer 1994: 357) でもあったのである。

(付記)

本稿作製のもととなった1996年の中米ホンジュラスにおける海外調査に關しては、財団法人住友財団からの1995年度海外の文化財維持・修復事業助成、国際交流基金からの平成8年度フェローシップ事業の交付、財団法人三菱財団からの平成8年度人文科学研究助成、財団法人トヨタ財団からの平成7年度研究助成を受けました。各財団・基金に対し深く感謝いたします。また、上山雅代さんには、本稿作製に關し図面作製を手伝っていただくと同時に、内容に關し貴重なコメントもいただきました。合わせて感謝いたします。なお、当然のことではありますが、私信・図面を含めた本稿の内容に關する責

任は、すべて筆者に帰するものであることを明記しておきたいと思います。

註

- 1) 本稿において筆者は、碑文学的証拠また図像を含む考古学的証拠により、ある政体が一つの地域を超えて別の地域に存在する政体と支配・従属関係を結んだと見られるとき、支配政体を「1次センター」、従属政体を「2次センター」、地域を超えて一つに統合された政体全体を「地方国家」と呼んでいる。東南マヤ地域においては、コバンが紀元7世紀までに支配・従属関係を結んだと思われる地域はきわめて広範にわたっている（1万平方キロ以上）ことから、「地方国家」という名称が適切であると思われる。しかし、筆者が使用する「地方国家」という用語は、必ずしも地理的に大規模である必要はないし、安定した政治階層を持つものでもない。むしろ、政体間の位階制は存在するものの、連続的で不明確なものであり、従属政体（2次センター）を支配政体（1次センター）へつなぐネットワークも、1次センターの力の強弱によって拡大したり、縮小したりしていたと考えられている。まさにこういった政体を「分節国家」また「銀河系の政体」とよぶ研究者もいる（Houston 1993: 142）。銀河系の政体論をマヤ地域に適用したデマレストも、地方国家という用語をつかう場合がある（Demarest 1992: 140）。また、ここでいう「周縁部」とは、筆者が以前別の論稿で定義した「低地マヤパターン」の物質文化が分布する地域からコバン谷を除いた地域である。また、「外縁部」は「モタグア下流域パターン」と「キミスタン西部パターン」の物質文化が分布する地域に、サンタ・バルバラ地域を加えた地域にほぼ対応している（Nakamura 1992, 1996: 210-235; Schortman and Nakamura 1991）。
- 2) 本稿では、単に「ファッシュ *Fash*」といった場合、ウイリアム・ファッシュのことを指している。バーバラ・ファッシュの場合は、その旨ファースト・ネームと一緒に記している。
- 3) ここでいう2次センターとは、ラ・エントラダ地域におけるカテゴリー5の遺跡、またはそれに対応する他地域の遺跡を指している（Nakamura et al. eds. 1991: 13-14）。具体的には、リオ・アマリージョ、パライツ、ラス・ピラス、エル・アブラ、エル・プエンテ、ラス・タピアス、ロス・イゴス、サンティアゴ・デ・ポスタ、ラ・ユニオンの9つである。古代政体間の階層性をどのように把握するのかという問題に関しては、本稿の議論からはずれるのでここでは述べていないが、「遺跡規模」に政治的な階層性が反映しているという前提には異論もある（e.g. Houston 1993: 3, 142）。しかしながら、ラ・エントラダ地域におけるカテゴリー分類は、遺跡規模だけでなく、政治的な階層性を反映していると想定されるその

他の要素も考慮にいられたものである。いずれにせよ、東南マヤ地域においては、コパン、キリグアー以外には十分な量の碑文が得られていないため、政治的な階層性の把握においても考古学的アプローチが中心とならざるを得ない。

- 4) この文字は、T-535, 536 (Thompson 1962: 150-151) の一異形と思われるが、リースがコパン王朝の先祖あるいは創始者と想定して名付けている人物「装飾されたアハウ」(Riese 1992: 132) のことではない。
- 5) この推定は、次の3点に基づいている。
 - 1 石彫ブロックの出土状況は建物崩壊後の2次的な状況 Secondary context であったものの、出土地点が、マウンドの頂上部と北西部(裏側)であった点。
 - 2 回収されている石彫ブロックの大きさは、コーニスに適当な幅を有するとともに、その一つはコーナー部の石であり、コーナー部を境にして2面に文字が刻まれている点。つまりこの碑文は、正面だけではなく側面にも碑文が続いていた点。
 - 3 1995~96年に行われた建造物2番の全面的な平面発掘では、正面階段や下部構造(プラット・フォーム)のモールディング装飾部には碑文がはめ込まれていた痕跡が確認されなかった点。
- 6) 基本は4つの長い建造物がほぼ直角に配置されて一つのプラサ(広場)を囲む形態のサイト・プランで、しばしばこうしてできたグループが相互に結合しあっている。プラサの出入口となるコーナー部の少なくとも2箇所以上が建造物同士の結合により閉じられており、プラサへの出入りが制限されている(Schortman and Nakamura 1991: 319)。

参考文献

Adams, Richard E. W.

1973 "The Collapse of Maya Civilization: A Review of Previous Theories" in *The Classic Maya Collapse*, edited by P. Culbert. Albuquerque: University of New Mexico Press, pp. 21-34.

1986 "Rio Azul". *National Geographic*, Vol.169, No.4.

Andrews V., and Barbara Fash.

1992 "Continuity and Change in a Royal Maya Residential Complex at Copan". *Ancient Mesoamerica*, Vol.3, No.1.

Aoyama, Kazuo., y AnnCorinne Freter.

1991 "Fechamiento de los artefactos de obsidiana de La Entrada por medio del método de hidratación" en *Investigaciones arqueológicas en la región de La Entrada*, Tomo II, editados por S. Nakamura et al. San Pedro

Sula, Honduras: Servicio de Voluntarios Japoneses para la Cooperación con el Extranjero (JOCV) e Instituto Hondureño de Antropología e Historia (IHAH), pp. 82-85 y pp. 140-141.

Braswell, Geoffrey E.

1992 "Obsidian-Hydration Dating: The Coner Phase, and Revisionist Chronology at Copán, Honduras." *Latin American Antiquity*, Vol.3, No.2.

Carneiro, Robert L.

1992 "Point Counterpoint: Ecology and Ideology in the Development of New World Civilizations" in *Ideology and Pre-Columbian Civilizations*, edited by Arthur A. Demarest and Geoffrey W. Conrad. Santa Fe, New Mexico: School of American Research Press, pp. 175-203.

Chase, Arlen F., and Diane Z. Chase.

1996 "More Than Kin and King: Centralized Political Organization among the Late Classic Maya." *Current Anthropology*, Vol.37, No.5.

Culbert, Patrick T. (ed.)

1973 *The Classic Maya Collapse*. Albuquerque: University of New Mexico Press.

1977 "Maya Development and Collapse: An Economic Perspective" in *Social Process in Maya Prehistory*, edited by N. Hammond. London: Academic Press, pp. 509-530.

1988 "The Collapse of Classic Maya Civilization" in *The Collapse of Ancient States and Civilizations*, edited by N. Yoffee and George L. Cowgill. Tucson: University of Arizona Press, pp. 69-101.

1991 *Classic Maya Political History: Hieroglyphic and Archaeological Evidence*. Cambridge: Cambridge University Press.

Demarest, Arthur A.

1986 *The Archaeology of Santa Leticia and the Rise of Maya Civilization* (Middle American Research Institute Publications 52). New Orleans: Tulane University.

1989 "The Olmec and the Rise of Civilization in Eastern Mesoamerica" in *Regional Perspectives on the Olmec*, edited by R. Sharer and D. Grove. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 303-344.

1992 "Ideology in Ancient Maya Cultural Evolution: The Dynamics of Galactic Politics" in *Ideology and Pre-Columbian Civilizations*, edited by Arthur A. Demarest and Geoffrey W. Conrad. Santa Fe, New Mexico: School of American Research Press, pp. 135-157.

Fash, Barbara.

- 1992 "Late Classic Architectural Sculpture Themes in Copán." *Ancient Mesoamerica*, Vol.3, No.1.
- Fash, William L.
- 1986 "La fachada esculpida de la estructura 9N-82: composición, forma e iconografía" en *Excavaciones en el área urbana de Copán*. Tomo I, editado por W. Sanders. Tegucigalpa, D.C., Honduras: Secretaría de Cultura y Turismo e Instituto Hondureño de Antropología e Historia, pp. 319-342.
- 1991 *Scribes, Warriors, and Kings: The City of Copán and the Ancient Maya* (Paperback Reprint Edition, 1993). London: Thames and Hudson.
- Flannery, Kent V. (ed.)
- 1976 *The Early Mesoamerican Village*. New York: Academic Press.
- Freter, AnnCorinne.
- 1994 "The Classic Maya Collapse at Copán, Honduras: An Analysis of Maya Rural Settlement Trends" in *Archaeological Views from the Countryside: Village Communities in Early Complex Societies*, edited by G. Schwartz and S. Falconer. Washington, D.C. and London: Smithsonian Institution Press, pp. 160-176.
- ギアーツ、クリフォード (小泉潤二 訳)
- 1990 『ヌガラ：19世紀バリの劇場国家』 みすず書房
- Grube, Nikolai., and Linda Schele.
- 1987 "U Cit-Tok, the Last King of Copán" in *Copán Note 21*. Copán, Honduras: Copán Mosaics Project and Instituto Hondureño de Antropología e Historia.
- Houston, Stephen D.
- 1993 *Hieroglyphs and History at Dos Pilas: Dynastic Politics of the Classic Maya*. Austin: University of Texas Press.
- 猪保健
- 1997 「古典期マヤ文明の衰退と戦争の研究—ゲアテマラ・アグアテカ遺跡とドス・ピラス遺跡—」 (『考古学研究』 第43巻第4号)
- Inomata, Takeshi.
- 1995 *Archaeological Investigations at the Fortified Center of Aguateca, El Peten, Guatemala: Implications for the Study of the Classic Maya Collapse* (Ph. D. Dissertation). Ann Arbor: University Microfilm International.
- Marcus, Joyce.
- 1993 "Ancient Maya Political Organization" in *Lowland Maya Civilization in the Eighth Century A.D.*, edited by J. A. Sabloff and J. S. Henderson.

Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection, pp. 111-183.

Mathews, Peter.

1991 "Classic Maya Emblem Glyphs" in *Classic Maya Political History: Hieroglyphic and Archaeological Evidence*, edited by P. Culbert. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 19-29.

Morley, Sylvanus G.

1935 *Guide Book to the Ruins of Quirigua* (Carnegie Institution of Washington Supplementary Publication No. 16). Washington, D.C.: Carnegie Institution of Washington.

中村誠一

1995 「ホンジュラス西部エル・プエンテ遺跡とコパン王朝の関係再考ー古代マヤ文明研究全体の視点からー」(『中南米考古学研究会誌』第5号)

1996 「古代マヤ文明研究の現状と課題ーコパンとその周辺地域を例としてー」(『考古学ジャーナル』(1) : 401号、(2) : 402号、(3) : 403号、(4) : 405号、(最終回) : 406号)

Nakamura, Seiichi.

1992 "Frontera prehispánica en la encrucijada del sureste maya." *Annals of Latin American Studies*, No.12. Japan Associations for Latin American Studies.

1994 "Desarrollo y decaimiento en la periferia de Copán" *Annals of Latin American Studies* No.14.

1996 *Nuevas perspectivas sobre el área sureste Maya: vistas desde la periferia de Copán*. Memoria presentada a la Fundación Toyota, Tokio.

Nakamura, Seiichi., Kazuo Aoyama, y Eiji Uratsuji (eds.).

1991 *Investigaciones arqueológicas en la región de La Entrada*. III Tomos. San Pedro Sula, Honduras: JOCV e IHAH.

Pahl, Gary W.

1987 "The Survey and Excavation of La Canteada, Copán, Honduras: Preliminary Report, 1975 Season" in *The Periphery of the Southeastern Classic Maya Realm*, edited by Gary W. Pahl. Los Angeles: UCLA Latin American Center, University of California, pp. 227-261.

Renfrew, A. Colin.

1986 "Introduction: *Peer-Polity Interaction and Socio-political Change*" in *Peer-Polity Interaction and Socio-political Change*, edited by C. Renfrew and J. Cherry. Cambridge: Cambridge University Press, pp.1-18.

Riese, Berthold.

1992 "The Copan Dynasty" in *Supplement to the Handbook of Middle American Indians* (Vol.5, Epigraphy), edited by Victoria R. Bricker. Austin: University of Texas Press, pp. 128-153.

Sabloff, Jeremy A.

1992 "Interpreting the Collapse of Classic Maya Civilization: A Case Study of Changing Archaeological Perspectives" in *Metaarchaeology: Reflections by Archaeologists and Philosophers* (Boston Studies in the Philosophy of Science. Vol. 147), edited by L. Embree. Dordrecht, Netherlands: Kluwer Academic Publishers, pp. 99-119.

佐藤孝裕

1994 「古典期マヤ文明崩壊再考—環境破壊の観点から—」(『歴史学研究』第654号)

Schele, Linda.

1989 "The Inscriptions of La Entrada Region, Honduras" en *Investigaciones arqueológicas en la región de La Entrada*, Tomo II, editados por S. Nakamura et al. (1991). San Pedro Sula, Honduras: JOCV e IHAH, pp. 209-217.

Schele, Linda., and David Freidel.

1990 *A Forest of Kings: Untold Story of the Ancient Maya*. New York: William Morrow and Company.

Schortman, Edward M., and Seiichi Nakamura.

1991 "A Crisis of Identity: Late Classic Competition and Interaction on the Southeast Maya Periphery." *Latin American Antiquity*, Vol.2, No.4.

関本照夫

1987 「東南アジア的王権の構造」(『現代の社会人類学3』東京大学出版会)

Sharer, Robert J.

1982 "Did the Maya Collapse? A New World Perspective on the Demise of the Harappan Civilization" in *Harappan Civilization: A Contemporary Perspective* (American Institute of Indian Studies), edited by G. A. Possehl. New Delhi: Oxford and IBH Publishing Company, pp. 367-383.

1994 *The Ancient Maya, Fifth Edition*. Stanford, California: Stanford University Press.

Stuart, David.

1985 "The 'Count-of-Captives' Epithet in Classic Maya Writing" in *Fifth*

- Palenque Round Table, 1983*. Vol. VII, edited by Merle Greene Robertson (General Editor) and Virginia M. Fields (Volume Editor). San Francisco: Pre-Columbian Art Research Institute, pp. 97-101.
- 1992 "Hieroglyphs and Archaeology at Copán." *Ancient Mesoamerica*, Vol.3, No.1.
- 1993 "Historical Inscriptions and the Maya Collapse" in *Lowland Maya Civilization in the Eighth Century A.D.*, edited by J. A. Sabloff and J. S. Henderson. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection, pp. 321- 354.
- Tambiah, Stanley J.
1976 *World Conqueror and World Renouncer*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thompson, J. Eric S.
1962 *A Catalog of Maya Hieroglyphs*. Norman: University of Oklahoma Press.
- Tourtellot, Gair.
1993 "A View of Ancient Maya Settlements in the Eighth Century" in *Lowland Maya Civilization in the Eighth Century A.D.*, edited by J. A. Sabloff and J. S. Henderson. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection, pp. 219-241.
- Webster, David., AnnCorinne Freter, and David Rue.
1993 "The Obsidian Hydration Dating Project at Copán: A Regional Approach and Why It Works." *Latin American Antiquity*, Vol.4, No.4.